

大災害 裁判原告家族が証言台に

三池大災害裁判は、五月七日福岡地裁で開かれた第三十回公判からいよいよ、原告自身による証言に切り、会社の責任追及を具体的に苦しめられた被害者家族の証言が、新しい段階にはいりました。まずこの目録台に立ったのは浦田紀美子さん、塚本美津子さん、石原まき子さん、山田早苗さんの四人で、ともにCO患者家族でした。怒りに打ちふるえての証言に、裁判長も顔をあげることができず、終始真剣な面持ちで耳をそばだてていました。同裁判もいよいよこれからです。別項の手記は、四人の証言者から寄せられた手記です。

証言者手記

大災害裁判のこんどの公判は、被災者としては初めて、私たちCO患者家族の証言でした。

あの炭じん大爆発でやっとなつた夫達ですが、COガスで人格をまったく変えられてしまい、子供のようになり、夫とは名ばかりで相談相手にもならないのです。

CO患者の夫をかかえての苦しみ、たつた一時間たらずで証言せよといわれてもいじりません。私達は、ほんとうに死ぬほど苦しんでいます。この苦しみ、CO患者の実態を知らない裁判長にわかってもらえたのだろうか、と心配です。

裁判長にとどいたか

いい尽せなかった多過ぎる苦しみ
今も人を殺し続ける会社を許せず

私達は、ほんとうに死ぬほど苦しんでいます。この苦しみ、CO患者の実態を知らない裁判長にわかってもらえたのだろうか、と心配です。

社長のツラも見たくない

低い賃上げに
誘致工場に渦まく不満

三池大爆発犠牲者の遺族の生活対策のため、として誘致されたアンニット(荒尾市妙見)と三池縫製(大牟田市柿園町)の両工場、今年どうやら賃上げがきまらずにいます。

どれほどの賃上げかといえば、縫製工場の場合日給で三十八円、五十円、八十円などいろいろらしく、「自分は八十円上がった」という人の日給が、その八十円を加えて三十九百九十円だのと。たとえひと月で二十五日満勤

れだけ苦しんできたかわかりませんが、私達は、いまだに災害責任を追究しない会社を許す事ができません。会社はこの態度こそ、今も坑内で災害を続行させているのであり、大爆発から百数十名も労働者を殺してきているのです。

原告団消息

4月20日 原告団編集会議。
25日 原告団事務局会議。
27日 役員会議。(①ミーデー取り組み。②裁判への取り組み)
5月1日 メーデー。(大牟田・荒尾でビラ配布)
7日 大災害裁判公判(CO患者家族による証言)
8日 原告団編集会議。
9日 CO患者家族の役員会議(九・二八坑内火災被災患者の補償打ち切りについて)

おわび

この号は重要な記事が殺到しました関係から、まず大災害裁判公判の記事がはいりませんでした。どうしてもお伝えしなければならぬ内容もあり、次号に掲載することになりました。

— 賃上げの件で、昼休みに皆が集まりましたが、それぞれに余りにも安い賃上げ額にきれているのです。たとえ交渉しにいっても取り上げてくれるような社長でなし、「何をいつても同じ」とあきらめの気持です。でも、入社して間もない者と勤続十五年の者の賃金が同じくらいで、前にあった勤続手当(二十五円)もいなくなりました。

— 体が弱いゆえに会社を休み勝ちな私は、昇給のときいつもにがい思いをしました。それでも勤続十五年です。それが、大牟田の最低賃金(二千六百円)をこその賃金しかもらっていません。私です。

— アンニット工場とて、右と大同少異のことだろう。

上村裁判闘争をふり返って



幸枝ちゃんも、上村裁判の原告だ。今年12歳で小学六年生。背も体重も、もう母親の京子さんを追いこした。

幸枝ちゃん

「今日は」
こは熊本県下城北の町——
菊水町。宇は皆行原三九一九番地。静かな村落の一隅にある家。

悲しみは深く

幸枝ちゃん、昭和四十二年八月七日の生まれ。その翌九月二十八日三川鉱坑底で起きた火災のため、機械工だった父親の孝知さんを奪われたとき、なんとまだ生まれてから五十二日にしかならない赤ん坊だったものだ。

幸枝ちゃんがんばれ 苦しみに負けず原告たち

と、また満一歳にもならぬ幸枝ちゃん親子に、すでに老境に踏みこんでいた実母——ハジメさんが加わり、三人、損害賠償を請求すること共に、それによつて三井独資資本の災害責任を追及し、ひいては災害の撲滅を期すというのが、裁判闘争の目的だったのである。事実、本件坑内火災にさきだつた四年前、あの三川鉱大災害をひき起こしてはあられと世の非難を

裁判提訴へ

坑内火災から半年後、昭和四十三年一月三十一日上村裁判はスタートした。

再度の勝利を

昭和五十年三月一日、それまで福岡地裁で続いていた上村裁判は原告・三池労組の完全勝利の判決をもって終った。

闘う原告三人

原告に、とりわけこの闘いは苦しいものだった。実母ハジメさんはすでに八十歳近くの老体で、今も大牟田市新港町三川鉱杜宅五十棟の荒屋にひとり住ま

浴びたにもかかわらず、依然として保安サボを続けては再びこの大災害をひき起こした会社をどうして許すことができたろう。